

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520901

研究課題名(和文)都市におけるソーシャルマイノリティの文化・社会・政治的特性の観光資源化

研究課題名(英文)Urban Tourism in Sydney: Using Cultural, Social and Political Activities of Social Minorities as Tourist Attractions

研究代表者

吉田 道代 (YOSHIDA, Michiyo)

和歌山大学・観光学部・教授

研究者番号：40368395

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：脱工業社会とよばれる時代にあり、利益をめぐるグローバルな都市間競争が進む中、シドニーは、「ソーシャルマイノリティ」という立場におかれた住民の政治的・社会的・文化的活動が都市に及ぼす影響に目をつけ、都市の個性的なイメージの創出と観光推進に彼ら彼女らを利用しようとしてきた。

公的な観光案内やガイドブックでは、こうした人々やその特異性が場所の特徴と結びつけて強調されると同時に、国民的アイデンティティ・多文化主義と結びつけて語られる。このような観光推進のあり方は、表面的には社会への包摂に見えるものの、対象となる人々の周辺性によって成り立つという点で問題をはらんでいると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Based on fieldwork in The Rocks, Leichhardt (the suburb known as 'Little Italy' in the 1960s and 1970s), Cabramatta in Fairfield (the area known for its concentration of Vietnamese-Australians) and Darlinghurst in Sydney, I explored how the activities of 'social minorities' such as labourers, immigrants, and gays and lesbians, and the landscape influenced by their activities, are represented in their use as tourist attractions by the tourism industry and local governments.

Although these places are presented to tourists as sites showing the Australian national identity (the Australian resistance to authority in the case of The Rocks, the multiculturalism of Leichhardt and Fairfield and the inclusiveness of Darlinghurst), the tourism promotion based on 'social minority' residents would be problematic as it indicates that the society maintains the boundary between 'majority' residents and 'minority' residents.

研究分野：社会地理学

キーワード：都市観光 ソーシャルマイノリティ シドニー 労働者 移民 同性愛者

1. 研究開始当初の背景

労働者や女性、同性愛者、移民などの「ソーシャルマイノリティ」に関する地理学の研究は、居住分布や空間的排除に焦点を当てることが多かった。しかし、現在、「ソーシャルマイノリティ」とされる人々の文化・社会的特性を資源に、大都市商業地の観光開発や宣伝を行うという現象が顕著になっている。

日本においては、例えば大阪市生野区の朝鮮半島出身者とその子孫の集住地区の商店街が、コリアタウンとして賑わいを見せている。他に、アニメのキャラクターへの愛着を土台とした趣味を持つ人々(いわゆる「オタク」)は、かつて否定的にみられていたが、現在秋葉原などオタク趣味に彩られた地区が、国内のみならず海外の観光客をひきつける商業地として発展している。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、「ソーシャルマイノリティ」と都市観光の関係に焦点を当て、シドニーを事例に労働者、移民、同性愛者といった「ソーシャルマイノリティ」とされる人々の属性(階級・エスニシティ・セクシュアリティ)とそれに基づく文化・社会的特性や政治的活動が、都市観光の資源としてどのように利用され、表現されてきたのかについて解明を試みることにした。

3. 研究の方法

上記の目的のもと、本研究では、二次資料を利用した他、2013年から2015年にかけてのシドニーでのフィールド調査(主に路上観察と関係者への聞き取り)を通じてデータを収集した。

4. 研究成果

(1)シドニーにおける「ソーシャルマイノリティ」と関わる観光推進の背景

調査結果の説明に先立ち、シドニーの「ソーシャルマイノリティ」とされる人々の属性とそれに基づく文化・社会的特性や政治的活動が観光資源として利用されるようになった背景について、概観しておきたい。

オーストラリアにおいて、シドニーをはじめとする州都が観光推進を始めたのは1980年代である。これらの都市は、これまでのオーストラリアに典型的なグレートバリアリーフのサンゴ礁やウルルといった自然景観を資源とする観光とは異なり、市内の娯楽・教養施設などを活かした観光推進に取り組むようになった。

この変化の背景には、先進国において1970年代以降に進んだ工業からサービス業への産業構造の転換がある。都市は生産から消費の場所へと変容し、都市の多くの自治体は、企業家のように利潤追求のための観光客誘致政策を展開していった(Harvey, 1989 廣松 1997; Law, 1993 内藤 1997)。

シドニーやオーストラリア国内の他都市

は、観光客をひきつけ消費を促すため、工場跡地や物流拠点としての機能を失った港湾を、消費とレジャーの空間に転換する政策を実施した。港湾地区の再開発やカジノの建設は、オーストラリアの州都に共通にみられる観光開発の事例である。

こうした横並び的な観光開発に加え、その都市特有の個性的なイメージを創出する様々な政策も実施されていった。シドニーの場合、オペラハウスやハーバーブリッジは、政府による本格的な観光推進以前からシドニーのアイコンとなっていたが、これに加え、ロックスやマコーリーストリート沿いの植民地時代の囚人用施設の利用にみられるように、歴史的建造物を活かしてオーストラリア国家の始まりの地であるというイメージを強調している(Morgan, 1991)。

「ソーシャルマイノリティ」とされる人々の文化・社会的特性および政治的活動の観光資源化は、シドニーにおいては、上記のような都市の個性を強化あるいは創出する観光推進の中で行われてきた。以下では、このような「ソーシャルマイノリティ」と関わる観光資源化の例として、1960年代の労働者による都心再開発計画への抵抗運動(ロックス)、イタリア系移民の集住・商業地区(ライカート)とベトナム系移民の集住・商業地区(フェアフィールド)、同性愛者の集住地・歓楽街(ダーリングハースト)をとりあげ、観光の文脈でどのように表象されてきたかについて、調査結果を基に説明する。

(2)労働者による都心再開発計画への抵抗運動の歴史の観光資源化—ロックス

ロックスは、シドニー中心市街地の中央にあるサーキュラーキーの近く、シドニーコブの西岸の位置にあり、現在は洗練された店が多い人気の観光地である。

しかし、植民地時代から1960年代にかけて、港湾で働く労働者とその家族が多く住み、こうした住民のための集合住宅が集まっていたことから、貧困地区というイメージがあった。また、20世紀初頭には、ペストの流行への対策として病原菌を運ぶとされるネズミの捕獲を奨励し、集められた大量のネズミの死骸の写真が新聞で報道されたことから、不衛生なイメージも付加された。

1960年代に入ると、同地区を含む都心再開発計画が立ち上がった。この再開発計画では、ロックスの老朽化した集合住宅を撤去し、高層ビルが並ぶビジネス街にすることになっていた。ニューサウスウェールズ州政府は、この再開発案を認可し、The Sidney Cove Redevelopment Authority(シドニーコブ再開発オーソリティ)を設置した。1968年には、この再開発計画を認める法案が州議会で承認された(Morgan, 1991)。

しかし、ロックスの住民はこれに強く反発し、The Rocks Resident Action Group(RRAG: 再開発・立ち退きに反対するロックス住民

団)を結成して、再開発計画の撤回を求める運動を展開した。さらに、RRGAの要請を受けて、ジャック・マンディをリーダーとする建設労働者連盟がこの抵抗運動に協力し、住民の立ち退き反対、歴史的建造物の保存、環境保護の3点を訴えた。これは、グリーン・バン運動とよばれ、運動を担う人々による取り壊し阻止のための座り込みなどの行動でマスメディアに注目された(Munday, 1981)。

新聞・テレビの報道を通じてこの抵抗運動が全国に知られるようになると、再開発反対の訴えはロックスの外の市民にも広く支持されるようになり、1970年代に入って再開発計画は見直されることとなった。その結果、労働者の住宅および植民地時代の建造物の一部は取り壊しを免れ、現在まで保存されている。

こうして残った歴史的建造物と労働者向け集合住宅および再開発反対運動の歴史が、観光資源として本格的に利用されるようになったのは、都市開発に力が入られるようになった1980年代以降である。植民地時代の建造物は、Cadman's Cottageなど歴史的遺産として一般に公開されているものもあるが、多くは、飲食店や土産物店、ギャラリーなど商業的に利用されている。1960年代のロックスの住民と労働者の抵抗運動で保存された労働者住宅もまた、植民地時代の労働者の居住や生活を伝えるということから歴史的遺産とみなされ、観光の対象にもなっている。労働者向け集合住宅を基に作られたFoundation ParkやSusannah Place Museumがその代表例と言えよう。Susannah Place Museumは、1990年代に最後の居住者が退去し、2000年代に博物館として一般公開された。労働者による再開発反対運動については、運動の現場にこれを示すプレートが設置された。プレートには、再開発反対運動の説明とともに、建造物の取り壊しに抗する座り込みの姿勢のまま警察に連行されるジャック・マンディの写真(新聞に掲載)がある。

現在、ロックスは、lonely planet Sydney (Dragicevich, 2012)や『地球の歩き方』(地球の歩き方編集室, 2015)などのシドニーの観光ガイドブックにおいて、オーストラリア国家の始まりの場所として紹介されることが多い。そこでは、植民地時代の建造物の案内とともに、植民地当時のロックスの開発に深く関わった囚人・船員・入植者や犯罪がはびこる(しかしスリリングな)街の主演としてギャング「ラリキン」に焦点を当てた説明が見られる。

1960年代のロックスの住民や建設労働者連盟の抵抗運動については、上記のような一般向けガイドブックで詳しく説明されることは少ないが、マンディの写真のプレートが設置された抵抗の現場は、ロックスをめぐる商業的ウォーキング・ツアーで重要な見物先の一つとなっている。そこでは、再開発反対運動の詳細とともに、植民地時代の名残をと

どめる通りや建造物の保存がこの運動の成果であることが語られ、マンディは、オーストラリアの国家的アイデンティティの場所としてのロックスを守った国民的英雄という役割を与えられている。

(3)「エスニックタウン」の観光地化—ライカートとフェアフィールド

植民地時代のオーストラリアでは、白人が有色人種に優越するという人種思想に根差した白豪主義が広がっていた。連邦結成後も政府は白豪主義に基づく移民政策を維持し、入植者をイギリスおよびアイルランド出身の白人(アングロ=ケルト系)に限定するよう努めてきた。しかし、第二次世界大戦後には、労働力不足を補うために人種・民族に関わる受入制限を緩めざるをえなくなり、アングロ=ケルト系以外の人種・民族的背景を持つ移民が増加した(Jupp, 1998)。こうした移民は、アングロ=ケルト系を主流とする社会において、「エスニック」と認識され、彼ら彼女らが集住し商業的な活動が活発化した場所は、「エスニックタウン」とよばれるようになった。シドニーで「エスニックタウン」とされる場所は様々であるが、本研究で焦点を当てたのは、イタリア系移民の集住・商業地区となったライカート、ベトナム系移民の集住・商業地区となったフェアフィールド(特にカブラマッタ)である。

まず、ライカートのイタリア系移民の集住・商業地区についての調査結果を説明する。オーストラリア政府は、1950年代から60年代にかけてヨーロッパの国々を中心に政府間契約を結び、労働者を受け入れた。これを契機にイタリアからの移民が増加し、シドニーでは、都心から5kmほど西側にあるライカートにイタリア系移民が集住した。1950年から60年代当時のライカートは工場の多い労働者地区であり、工場が主な就業先であった当時のイタリア系移民は、通勤に便利で収入にも見合った居住地として、ここを選択したと考えられる。ライカートでは、イタリア系移民の商業活動も活発化し、特にパラマッタ・ロードから北にのびるノートン・ストリート沿いに、イタリア系経営者によるイタリア系顧客を対象とした店舗が立ち並び、「リトル・イタリア」とよばれるようになった(Burnley, 2001)。

1980年代、そのライカートで、イタリア系住民の多い地区というイメージを活かし、元工業地区を消費地に変容させることを目的に、公的機関が主導する再開発が進められた。

再開発の中心となったのがイタリアン・フォーラムである。これは、図書館やイタリア文化センターなどの文化施設、レストランとカフェ、ファッション関連の店およびサービスの事務所などの商業施設、住宅(アパート)が含まれる複合的機能を持った施設で、水道局所有の使用されていなかった土地を利用して建設された。

イタリアン・フォーラムは、広場を中心に建物が取り囲む構造になっており、建築デザインにはイタリアの様々なモチーフが採り入れられ、レストランやカフェでは本格的なイタリアの味が楽しめるという評価もあった (Mura & Lovelock, 2009)。2000 年の開始時には集客力が高く、海外からの観光客も受け入れ、シドニーのイタリア系住民にとっての文化社会的なコミュニティ活動およびビジネスの拠点、オーストラリアの多文化主義の商業的成功事例とみなされた (Davie, 2003)。しかし、2000 年代後半には徐々に衰退し、2010 年代に入ってから空き店舗が目立つ状況となった (Dumas, 2014)。

2014 年から 2015 年にかけて、空き店舗を無料で提供してアート活動を促すプロジェクトの支援を受けたアート・ワークショップの場所としての利用が 1 件観察されたが、イタリア系住民の文化的背景とは無関係であった。イタリアン・フォーラム内にあるイタリア文化センターも、2013 年より俳優養成所として使われており、イタリア系移民の文化継承の場としての利用はなかった。したがって、イタリアン・フォーラムは、当初予定されたイタリア系移民の民族文化を商業的に活かすということも、イタリア系住民にとってのイタリア文化の継承の場としての役割も果たしているとは言えない状況にあった。

もう一つの調査対象地フェアフィールドのカブラマッタにあるベトナム系移民の集住・商業地区は、1970 年代から 90 年代半ばにかけてのオーストラリアによるベトナム難民の受け入れを契機に形成された。ベトナムからボートで脱出した人々やその家族に対しては、オーストラリア政府が国内各地に宿舎 (ホステル) を用意して受け入れた。カブラマッタは、これらの人々の定住初期に提供されるホステル近くにあり、周辺に就業先となる工場が多く、家賃も比較的低いことから、ベトナム系住民が増加したと考えられる (Dunn, 1993)。さらに、住民の中から商業活動を始める人が出て、ベトナム系経営者による主にベトナム系顧客を対象とした店舗が増えた。

こうして、カブラマッタのベトナム系移民の集住・商業地区としての位置づけが確立していったが、そのイメージは必ずしも良好ではなかった。1990 年代には、マスメディアを通じて、貧困地区・犯罪地区としてのイメージや人種・民族的ゲッターのイメージが広められていた。また、この時期には、同地区代表の国会議員ジョン・ニューマンが射殺され (Priest, 2010) イメージの悪化に拍車がかかった。しかし、2000 年代には、そうした否定的なイメージは次第に薄れていった。

2012 年にテレビ局 SBS によって制作・放映された *Once upon a time in Cabramatta* (SBS, 2012) は、こうしたカブラマッタのベトナム系住民の集住・商業地区の変化を、ベトナム系住民によるコミュニティ再生をかけた犯

罪組織との戦いの物語そして多文化主義オーストラリア社会への参入の物語として描いている。番組は、同地区が観光客も訪れる場所となったことを示す訪問客数で締めくくられ、「主流」に開かれた観光地となりうることを示唆されている。

(4) 同性愛者による政治的イベントの観光資源化—ダーリングハースト

次に、ダーリングハーストにおける同性愛者の集住・商業地区について説明する。シドニーの中心市街地東南部にあるダーリングハーストには、男性同性愛者が集まることで知られた歓楽街がある。これは 1970 年代以降にオックスフォード・ストリート沿いに形成されたもので、同性愛者向けの店が集中しているハイパークとパディントン・タウンホールの間は「黄金マイル (The Golden Mile)」とよばれていた (Reynolds, 2009)。ここは、同性愛者向けの店舗が多い商業地区であると同時に、男性同性愛者の居住者が多い地区でもある (ABS, 2013)。

同地区で同性愛者のコミュニティが発展するにつれ、これを基盤に同性愛者の権利の保護とセクシュアリティの多様性の承認を求める政治的活動も活発に行われるようになった。こうした運動が盛り上がる中で、その主張を社会に広げるために、1978 年に同性愛者の祭典シドニー・ゲイ・アンド・レズビアン・マルディグラ (以下 SGLMG とする) が開始された。初回は、逮捕者が 53 人出るなど、社会的に受け入れられた活動とは言えない状況であった (Carbery, 1995)。しかし、1980 年代末になると、SGLMG は、主要政党、自治体、企業からの支援を受け始める。この時期までに、パレードの参加者は 1 万人規模となっており、見物人も 50 万人を超えていた。

シドニー市政府は、現在このイベントに助成金を出し、SGLMG 開催期間中には市庁舎の正面に性的多様性のシンボルであるレインボー旗を掲げ、性的多様性の承認と同性愛者への歓迎の意を表している。ニューサウスウェールズ州の観光局については、保守政権下の 1989 年に州の観光案内からこのイベントの情報が全て削除されたことがあったが (Waite & Markwell, 2006, p.208) 1995 年には労働党のボブ・カー州知事の下で、州政府も公的に支援するようになり、以降は継続して州の観光案内で紹介されるようになった (Waite & Markwell, 2006, p.207)。

こうしたイベントに自治体が協力する理由は、2015 年の聞き取り調査で得られたニューサウスウェールズ州およびシドニー市のイベント担当者、同性愛者コミュニティに長年関わってきた方の意見を総合すると、次のように要約できる。

まず、オーストラリアの同性愛者コミュニティは、政治家に対して強い影響力を持っている。同性愛者コミュニティの支援を受けて

当選した政治家の影響で、同性愛者コミュニティの活動家が同性愛者関連の施策に関わり、自治体と同性愛者コミュニティの協力関係が作られている。また、セクシュアリティの多様性の承認がオーストラリアの多文化主義の理念と合致するという点で、自治体がイベントに協力しやすい社会環境にある。そして、同性愛者に関連するイベントは、同性愛者に限らず異性愛者の旅行者もひきつけることから、地元で多大な経済的利益をもたらすということが広く社会に認識されており、イベントへの公的支援が容易に正当化される。

一方で、ニューサウスウェールズ州の職員からは、次の2点に関わってSGLMGの意義が失われつつあるという指摘があった。まず、イベントの主眼は、セクシュアリティの多様性の承認の要求であるが、オーストラリア社会においては、セクシュアリティの多様性は広く承認されつつあり、公の場で改めて承認を求める必要性がなくなっている。また、このために、同性愛者であるということを隠す必要もなく、あるいは表立って同性愛者として権利を主張する必要も感じないという人が増加し、このような人は同性愛者関連のイベントには関心を持たない。2点目は、同性愛者のライフスタイルの変化である。現在、若い世代の同性愛者の間では、家庭生活を重視する人々が増えている。SGLMGの最後を飾るプライド・パレードは、セクシュアリティの自由な表現や多様性を参加者のパフォーマンスを通じて主張するものであるが、これらの家庭重視の人々は、パレードでのパフォーマンスよりも家族で参加できるピクニックイベントの方に関心を寄せるような傾向もみられるとのことであった。こうした指摘は、Wotherspoon (2016)の著作でも確認できる。これらの傾向がSGLMGのようなイベントに実際に及ぼす影響については、これを裏づけるデータはないが、2016年3月に実施されたSGLMGのパレードの見物人数は、1990年のピーク時の60万人に比べ半分の30万人となっており (Lee, 2016)、人気の陰りがうかがえる。

(5) 調査結果のまとめ

本研究では、「ソーシャルマイノリティ」とされる人々の属性とそれに基づく文化・社会的特性や政治的活動が、都市観光の資源としてどのように利用され表現されてきたのかを解明することを目的に、1960年代のロックスにおける住民・労働者による都心再開発反対運動、ライカートのイタリア系移民およびフェアフィールドのベトナム系移民の集住・商業地区、ダーリングハーストの同性愛者の集住・商業地区についてみてきた。

現在のロックスでは、保存された植民地時代の建造物を利用し、国家としてのオーストラリアの始まりの場所というイメージが強調されている。1960年代にロックスで展開さ

れた住民とこれに協力する建設労働者連盟の会員による再開発反対運動は、植民地時代のロックスの住民と直接的な関係はないものの、観光の分脈では、植民地時代の労働者に連なる存在として扱われている。これらの人々は、ロックスにおける労働者の生活の歴史の一部を形作った人々として、また、権威に屈せず労働者の生活と住居を守り切った闘士として、ロックスを舞台とするオーストラリアの国民的物語に組み込まれていた。

ライカートのイタリア系移民およびフェアフィールドのベトナム系移民の集住・商業地区は、それぞれの移民集団がオーストラリアで増加した時期が異なり、またライカートのイタリア系移民の集住・商業地区がイタリア系コミュニティの外部の人々をひきつける観光地としての位置を確立した時期があったのに対し、フェアフィールドのベトナム系移民の集住・商業地区は、一部の店舗(ベトナム麺で人気の店)を除き、ベトナム系コミュニティの外の人々をひきつけるには至っていないという違いがある。しかし、どちらの移民の集住・商業地区も、観光宣伝においては、多文化主義の下での多様な民族文化を持つ人々が共存する場として、また、外部の人々にとってそれを体験できる場として演出されている。なお、イタリア系移民の集住・商業地区については、イタリア出身の移民数の減少と子孫の居住地の分散を受けて、「リトル・イタリー」の体裁を失いつつあり、今後この地域をイタリアのイメージで演出していくことは困難であると思われる。

ダーリングハーストの同性愛者の集住・商業地区もまた、公的機関が観光宣伝を行う場合には、多文化主義が前面に押し出される。SGLMGのような同性愛者のイベントは、セクシュアリティの多様性の表現だけでなく、そうしたオーストラリアの多文化主義を祝う場として演出されている。しかし、オーストラリア社会における性的多様性の承認の進展や同性愛者コミュニティ内部のライフスタイルや価値観の変化の中で、こうしたイベントの意義が同性愛者コミュニティの中で失われつつあることも示唆されている。

以上みてきたように、「ソーシャルマイノリティ」とされる人々の属性とそれに基づく文化・社会的特性や政治的活動を都市の観光資源とする場合、オーストラリアでは、国民アイデンティティや多文化主義と結びつけ、「ソーシャルマイノリティ」に対する包摂のイメージを打ち出すことが明らかとなった。しかし、ライカートのイタリア系移民の集住・商業地区やダーリングハーストの同性愛者の集住・商業地区を拠点に行われるイベントの縮小傾向が示すように、「ソーシャルマイノリティ」としての周辺的位置づけが解消されるにしたがい、観光資源としての価値も失われていく。

本調査結果からは、「ソーシャルマイノリティ」と関連づけたシドニーの都市観光の推

進が「ソーシャルマイノリティ」のカテゴリーを強化しているかどうかについて、明確な結論を出すことはできない。しかし、こうしたカテゴリーと関わる都市観光の推進が継続されるとしたら、それは、多様性の承認の指標であるよりも、その対象となった人々の「ソーシャルマイノリティ」としての周辺的位置づけが解消されていないことを示しているということと言えるであろう。

<引用文献>

- ABS (2013). 4102.0 - Australian Social Trends, July 2013. Retrieved 2016, May 30, from <http://www.abs.gov.au/AUSSTATS/abs@.nsf/Lookup/4102.0Main+Features10July+2013#live>
- Burnley, I. H. (2001). *The impact of immigration on Australia: A demographic approach*. Melbourne: Oxford University Press.
- Carbery, G. (1995). *A history of the Sydney Gay and Lesbian Mardi Gras*. Parkville: The Australian Lesbian and Gay Archives Inc.
- 地球の歩き方編集室 (2015) 『地球の歩き方 2015～16 シドニー&メルボルン』ダイアモンド・ビッグ社
- Davie, R. (2003). *Changing urban patterns in Leichhardt*. Unpublished report for Geography 1002 Human Environments in conjunction with the Science Talented Students Program at The University of Sydney.
- Dragicevich, P. (2012). *Lonely planet Sydney*, 10th ed. Melbourne: Lonely Planet Publications.
- Dumas, D. (2014, June 7). Leichhardt's Italian Forum goes from retail tiger to white elephant. *The Sydney Morning Herald*. Retrieved 2016, May 30, from <http://www.smh.com.au/nsw/leichhardts-italian-forum-goes-from-retail-tiger-to-white-elf-20140606-39oyr.html>
- Dunn, K. (1993). The Vietnamese concentration in Cabramatta: Site of avoidance and deprivation, or island of adjustment and participation?. *Australian Geographical Studies*, 31(2): 228-245.
- Harvey, D. (1989). From managerialism to entrepreneurialism: The transformation in urban governance in late capitalism. *Geografiska Annaler*, 71-B(1): 3-17. [廣松悟訳 (1997) 「都市管理者主義から都市企業家主義へ—後期資本主義における都市統治の変容」『空間・社会・地理思想』2: 36-53.]
- Jupp, J. (1998). *Immigration*. 2nd ed. Melbourne: Oxford University Press.
- Law, C.M. (1993). *Urban tourism: Attracting visitors to large cities*. London: Mansell. [内藤嘉昭訳 (1997) 『アーバン・ツーリズム』近代文芸社]
- Lee, S. (2016, March 7). Sydney Gay and Lesbian Mardi Gras celebrates a momentous

- year for the LGBT community. *San Diego LGBT Weekly*. Retrieved 2016, May 30, from <http://lgbtweekly.com/2016/03/07/sydney-gay-and-lesbian-mardi-gras-celebrates-a-momentous-year-for-the-lgbt-community/>
- Morgan, G. (1991). History on the Rocks. *Australian Historical Studies*, 24(97):78-87.
- Munday, J. (1981). *Green Bans & beyond*. Sydney: Angus & Robertson.
- Mura, P. and Lovelock, B. (2009). A not so Little Italy?: Tourist and resident perceptions of authenticity in Leichhardt, Sydney. *Tourism, Culture and Communication*, 9 (1-2): 29-48.
- Priest, T. (2010). *On deadly Ground: The assassination of John Newman MP*. Sydney: New Holland.
- Reynolds, R. (2009). Endangered territory, endangered identity: Oxford Street and the dissipation of gay life. *Journal of Australian Studies*, 33(1):79-92.
- SBS. (2012). *Once upon a time in Cabramatta: A story that changed the nation*. Richmond, Victoria: Madman Entertainment.
- Waite, G. & Markwell, K. (2006). *Gay Tourism: Culture and Context*. NY and London: Haworth Hospitality Press.
- Wotherspoon, G. (2016). *Gay Sydney: A history*. Sydney: New South Publishing

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

吉田道代 (2015) 「同性愛者への歓待—見出された商業的・政治的価値」『観光学評論』3(1): 35-48 . [査読有]

〔学会発表〕(計1件)

吉田道代 (2014) 「セクシュアルマイノリティへのホスピタリティをめぐる政治と観光ビジネス」観光学術学会第3回大会 (京都文教大学, 京都, 7月5-6日)

〔図書〕(計4件)

吉田道代 (2015) 「LGBT観光—ニッチ(隙間)市場を超えて」『地理』719: 29-37 .

吉田道代 (2014) 「ジェンダー」大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治編著 『観光学ガイドブック』(pp.156-161) ナカニシヤ出版

吉田道代 (2013) 「オーストラリア」寺阪昭信・伊東理編著 『図説アジア・オセアニアの都市と観光』(pp.115-124) 古今書院

吉田道代 (2013) 「同性愛者とホスピタリティ」青木義英・神田孝治・吉田道代編著 『ホスピタリティ入門』(pp.58-65) 新曜社

6 . 研究組織

(1)研究代表者

吉田道代 (YOSHIDA, Michiyo)
和歌山大学・観光学部・教授
研究者番号: 40368395